

南京国際平和通信

第 68 号(2025 年 6 月)

日本軍細菌戦部隊 1644 部隊の留守名簿を収蔵

6 月 14 日、記念館は日本軍細菌戦部隊 1644 部隊の留守名簿を収蔵したことに對して、周峰館長は次のように述べた。「日本が中国を侵略した戦争の中、南京に 1644 部隊を設立し、細菌工場を建設して細菌実験を行い、また細菌を戦場に散布して多くの中国軍民を殺したのは、言語道断の反人類犯罪である。記念館には、日本軍 1644 部隊の細菌実験の犠牲者の遺骨や、同部隊隊員の記章、写真などの資料が所蔵されている。今回、1644 部隊の留守名簿が南京に戻ってきたことは、日本軍国主義が細菌戦を起こした罪の確かな証拠であることを改めて示している。私たちはこれを機に、資料研究を行い、展示や歴史教育に活用し、人類の正義と平和を守っていきたい。」

日本軍細菌部隊元隊員の子孫が南京を訪問

6月26日午後、「日本軍細菌戦史料寄贈式」が記念館で行われ、158兵站医院留守名簿、元隊員兵籍簿複製、日本軍細菌戦部隊の作戦写真などの資料が寄贈された。

寄贈者の竹上勝利さんは数年前、父親宮下利市氏の遺品を整理した際、複数の日本軍写真集を発見し、内容は日本軍華中防疫給水部隊が中国で作戦したものである。竹上さんは、父親が1932年から3度にわたり衛生兵として中国に渡り、1941年に1644部隊の支隊に転属することになった。1644部隊の本部は南京に置かれ、表向きは防疫を装っていたが、実際にはコレラ、チフス、ペストなどの戦争用細菌を培養していた。

「父は生前、従軍経験についてほとんど語らなかった。学歴が普通で、性格も非常に穏やかだ」と竹上勝利氏は回想した。「写真集には残忍な写真は一切なかったが、細菌戦に関わる佐藤大雄という人物の姿も写っている。私の知る限り、父のように衛生兵から中尉に昇進した例は多くありません。だから、父が所在する部隊の行動詳細を調査し始めた。」

南京に到着後、竹上さんは「南京大虐殺史実展」を見学し、細菌戦研究の中国学者と意見を交わし、南京大虐殺生

存者夏淑琴さんの孫娘・夏媛さんとも歴史記憶の伝承について対話した。



「慰安婦」問題研究専門書『追索』が初公開

7月3日、記念館分館・南京利濟巷慰安所旧跡陳列館で「慰安婦」問題研究専門書『追索：「慰安婦」朴永心と彼女の姉妹たち』の新書発表式が行われた。同書は上海師範大学の陳麗菲教授と蘇智良教授の共著で、朝鮮出身の日本軍「慰安婦」制度被害者・朴永心氏の体験を軸に、南京利濟巷慰安所旧跡での被害状況や現場確認の経緯を収録した。

展示館の「慰安婦」をテーマにした彫像は、朴氏が同盟国軍に解放された時の写真をモデルに制作されものである。また、朴氏が実際に住んでいた展示館B棟19号室に

は畳や古い木製テーブルが再現され、壁には朴氏の写真が掲げられている。



中国全民族抗戦勃発 88 周年記念式を開催

7 月 7 日午前、記念館で「中国全民族抗戦勃発 88 周年記念式」が行われた。南京大虐殺歴史記憶伝承者、南京市青少年代表、紫金草ボランティア代表、記念館職員代表など、社会各界から 100 人以上が参加した。

南京市青少年代表は詩『彼は立ち上がった』を朗読し、教師代表、紫金草ボランティア代表ら6人が共に平和の鐘を鳴らした。

最後に、南京大虐殺犠牲者をはじめとする虐殺された同胞、抗日戦争勝利のために命を捧げた革命烈士と民族英雄、中国人民と共に戦って犠牲した国際友人たちに花輪を捧げ、参加者全員が献花した。



故生存者・劉貴祥氏と謝桂英氏の消灯式を行った

7月2日午前、記念館の南京大虐殺生存者写真壁の前で、最近亡くなった二名の南京大虐殺生存者・劉貴祥氏と謝桂英氏の消灯式が行われ、お二人の展示写真の色はカラーから次第にモノクロに変わった。参加者全員が白菊を持ち、厳かな表情で亡くなった生存者の写真に向かってお辞儀をした。

劉貴祥氏は5月2日に95歳で亡くなった。孫娘の胡静雅さんは「1937年、わずか7歳だった祖父は地獄のような

体験をし、父と弟が惨殺されるのを目撃し、日本軍に頭を殴られて傷跡を残された。この痛ましい体験は、祖父が一生かかっても消すことのできない傷だが、平和への深い願いを生み出した。祖父は歴史を語ることを使命だと覚悟し、何度も被害の歴史を後世に伝えた。私はそのバトンを受け継ぎ、文字や映像、行動でより多くの人に真実を伝えたい」と語った。

謝桂英氏は5月15日に101歳で亡くなった。息子の姜忠栄さんは、母親が日本で行った南京大虐殺証言集会の資料を記念館に寄贈した。



日本訪問団が記念館で歴史の真実を探る

7月11日午後、日本関西地区「記憶・平和友好の旅」訪中団が記念館を訪問した。

訪中団最年少の17歳の高校生・黒田沙希さんは、小学校と中学校で南京大虐殺に関する歴史を学んだことはないと打ち明けた。「記念館を見学して、このような残酷な

ことが実際に起こったことをはっきり認識した」と語り、「日本に帰ったら、記念館で見聞きしたことを友達に伝えたい」と述べた。

28歳の万谷朱音さんは、高校の歴史授業を振り返り、当時学んだのは主に日本が戦争で受けた傷であり、日本が中国で何をしたかについては教科書にほとんど記載されていなかったと話した。

住田弘之さんの父親は、沖縄に駐屯した日本海軍兵だった。「日本の侵略を忘れてはならず、南京大虐殺の歴史も決して忘れてはならない。『前事不忘、後事之師』という言葉に深く感動し、これを座右銘にする」と語った。

